岡山・天満屋と福井・だるま屋の開業時の立地と景観

- 地方都市における近代百貨店に関する研究 その2 -

LOCATION AND CITYSCAPE OF THE OPENING
OF TENMAYA IN OKAYAMA AND DARUMAYA IN FUKUI

- Study on modern department stores in regional cities Part 2 -

野中勝利*

Katsutoshi NONAKA

This paper focuses on the Tenmaya department store in Okayama city and the Darumaya department store in Fukui city, describing the characteristics of the locations, the exteriors of the buildings, and the background of the surrounding cityscapes when the stores first opened for business. Tenmaya opened in a part of Okayama that had been a commercial district since the Edo period. Darumaya was established on the site of the former prefectural office across from Fukui Station. Tenmaya's display windows gave it a modern appearance, while Darumaya was housed in a low-rise building that had an accessible feel for shoppers.

Keywords : Department store, Location, Landscape, Modernization, Tenmaya, Darumaya

百貨店、立地、景観、近代化、天満屋、だるま屋

1. はじめに

本研究は、戦前に地方都市で開業した百貨店について、立地特性、建築外観及びまち並みにおける景観から、開業時における実態を明らかにするものである。

既稿^{注1}では、六大都市以外の地方都市で開業した最初期の百貨店である鹿児島山形屋を研究対象として分析した。山形屋以降、全国的に百貨店の開業が広がった。本稿では1937年の百貨店法によって百貨店の立地や経営が一定の統制を受けるまでの間に開業した百貨店のうち、岡山の天満屋と福井のだるま屋を研究対象とする。

各地で開業された百貨店は、経営的な問題あるいは戦災などの被災などによって淘汰されたが、この二百貨店は、山形屋同様、戦前、戦後そして現在まで一貫して営業されている地域の一番大店である。現在の天満屋は、山形屋と同じく店舗に隣接してバスターミナルがあり、市民の集散拠点と一体となっている。だるま屋は、1943年の火災、1945年の空襲、1948年福井大地震により、三度焼失した。しかし1953年、市民生活への多大な貢献等から、福井県知事、福井市長及び福井商工会議所会頭から、その復旧に対する要望が出されるなど、地域の支持を受けている^{注2}。対象とした百貨店はいずれも都市経済の重要な一翼を担い、経営の安定、市民の支持、地域密着といった共通の土俵にある。

また近代百貨店建築としての天満屋は1925年、だるま屋は1928年の開業であり、これらを対象とすることで地方都市での百貨店の展開期を追うことができる。以上のような理由からこの二百貨店を研究対象事例とした。また既稿の鹿児島・山形屋の分析で明らかになった結果と適宜比較対照することで、地方都市での百貨店の実態をより明らかにすることができる。なお既稿でも指摘したように地方都市での百貨店に関する研究の蓄積は進んでいない。

天満屋には社史等^{注3}がある。だるま屋は独自に編纂した社史を公刊していないが、創業店主がまだ現役中に、その友人である新聞記者が店主の半生を著した文献^{注4}があり、それに置き換えることができる。それらを参考資料とし、当時の新聞、写真、地図等の一次資料の確認と収集に努めた。両百貨店に対しても、所蔵する資料の照会を行ったが、いずれも戦災等により当時の資料は散逸し、保存されていない旨の回答を得た。その一方、特に福井県文書館にだるま屋に関する資料群が保存されていることを確認した。これは西川秀男氏から寄贈された資料群である。1928年生まれの西川氏は1945年にだるま屋に入社し、役員等を経て1994年に退職するまで50年近く勤務していた^{注5}。寄贈資料には、西川氏が収集・作成した資料や年表、未刊行のだるま屋20年史の編集資料、創業から1945年までの年次記録などが含まれている。特に1928年の開店日から

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科 准教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Univ. of Tsukuba, Dr. Eng.

表1 研究対象の百貨店の経営経緯

年	山形屋	天満屋	だるま屋	備考
(前身)	藩政期に山形から鹿児島に移り呉服商を営む	藩政期に小間物屋から呉服店になる(岡山近郊の西大寺)	—	
1896 明治 29		(合名会社伊原本呉服店)		
1901 明治 34		(天満屋呉服店と改称)		
04 明治 37				三越(東京、大阪)
07 明治 40				高島屋(大阪)
08 明治 41				松坂屋(東京)
10 明治 43	(店頭で洋風ハラベット)			松坂屋(名古屋)
12 大正 元		(岡山市に出店)		
13 大正 2				高島屋(京都)
16 大正 5	洋風建築の店舗新築・開業			
17 大正 6	株式会社山形屋呉服店(株式会社化)			
18 大正 7		株式会社天満屋呉服店(株式会社化)		
19 大正 8				白木屋(東京)
24 大正 13		岡山店を本店に		
25 大正 14		洋風建築の店舗(本館)新築・開業		
26 昭和 元		別館増築・開業		
27 昭和 2		西館、北館増築・開業		
28 昭和 3		株式会社天満屋に改称	だるま屋・開店(個人経営)	
29 昭和 4	別館増築・開業			
30 昭和 5				
31 昭和 6			東館「ゴドモの国」増築・開業	
32 昭和 7	新館増築・開業			
36 昭和 11		火災により本館が焼失 新本館の増築・開業	南館三階増築・開業	
37 昭和 12	株式会社山形屋に改称		一部鉄骨四階増築・開業	百貨店法
43 昭和 18			火災による焼失	
45 昭和 20	空襲による被害	空襲による被害	空襲による被害	

1939 年までの創業期の主な日々の出来事が日誌的に記録されている資料(以下、「日誌」とする)もある。これらの西川秀男家文書(以下、西川家文書とする)も活用した。

2. 百貨店の立地特性

(1) 天満屋

天満屋の前身は、藩政期から岡山近郊の西大寺で営まれた呉服商である。1896 年に合名会社伊原本呉服店を設立した。東京では三越が 1893 年に越後屋を合名会社三井呉服店に改組しており、業界内では比較的早い法人化であった。1901 年には天満屋呉服店に改称した。

天満屋は、山陽鉄道を始めとして鉄道の結節点として商圈を拡大しつつあった岡山への進出を目指し、1912 年 10 月、岡山市中之町の店舗を買収して出店した。1922 年 5 月には、南隣の下之町に綿布、洋反の分店を設けた。この分店では床をコンクリートにして、座売りから立ち売りに改め、またガラス戸棚を導入した。1924 年 6 月に分店裏に新店舗の建設に着手、同年 12 月には本店をこの地に移転し(図 1)、西大寺の店を支店とした。その翌年 3 月には洋風木造三階建ての新店舗で開業した。この新店舗が近代的な百貨店としての出発となった。

1901 年に発表された岡山唱歌には、「上中下の三町に 続いて栄紙屋町 西大寺町に橋本町 いずれも商売盛なり」という節がある。上之町、中之町、下之町と連なるこの通りは、当時の岡山の中心商業地であった。その中でも天満屋の発展によって、商店街の中心はそれまでの上之町から下之町に移ったといわれている^{注 6}。この通りは 1924 年 5 月に自動車や荷馬車の通行が禁止され、歩行者中心の「最も賑はしい通り^{注 7}」であった。1929 年に発行された観光案内書^{注 8}で推奨されている岡山駅を起終点とする市街の「遊覧順路」においても、天満屋前の通りが含まれている(図 1)。なおこの通りは 1927 年 2 月に認可された都市計画街路に指定されなかった^{注 9}。

1930 年 11 月に岡山で陸軍特別大演習が行われた。他の都市と同様に、天皇一行を迎えるため市内の要所の整備が進められた。その

後の市街の様子は、「鶴見橋、城下停留所、岡山駅間は御覧の通りアスファルトになりました。これも大演習の際の俄仕事です車駕の御通りになる所だけ舗装したのです。…(略)…あちらこちらに十三間幅の、人道車道を区別し、並樹を植並べた新道が出来て見ますと、昔大通りであつたこの目貫の町も、狭くて窮屈で、頭を圧へつけられるやうで、よくもこれで済んで居たものだと感ぜられます。

図1 天満屋の立地と電気軌道ルート(電車通り)

(1920 年岡山市街図に天満屋と 1936 年時点の電気軌道ルートを記入)

図2 天満屋の立地と「遊覧順路」

(1920 年岡山市街図に天満屋と蓮昌寺～岡山駅の遊覧順路を記入)

若し一二軒の本屋と天満屋とが無かつたならば、私は殆んどこの本通りを通る事は無いでせう。^{注10}」と記されている。天満屋が立地していた通りは、藩政期の「目抜き通り」であり、明治以降も市内の中心的繁華街であった。天満屋は近郊から岡山への進出に際し、既に商店の連なる商業集積地に店出た。しかし市内の他の道路の整備が進むと、この通りは相対的に「狭くて窮屈」な道路にみえるようになったが、天満屋は百貨店として市民を強力に誘引していることがわかる。

1934年に金沢の商店主らが岡山を視察した報告^{注11}では、「…驛近くに、唯一の商店街有り、上之町、中之町、下之町、…（略）…にして舗装されたる三間半位の道路の両側に、五百餘りの商店軒を並べ競うて顧客の吸収に餘念なし。静かなる電車通りより一步入りて此の賑盛を見る、實に驚くばかりに綺麗だ」と、この通りの賑わいを表し、併せて天満屋についても、「相當の顧客を吸収」していると評している。

(2) だるま屋

福井の商家は藩政期、北陸街道に沿って発達した。明治時代に繁華街として賑わっていたのは呉服町や本町である^{注12}。市街の東方に立地した福井駅の開業（1896年）当時は、駅前に百間堀があったので、市街の中心から東方の駅に向かうには大きく迂回しなければならなかった（図3）。百間堀の南端が埋め立てられて、駅正面から西方向に延びる駅前通りが開通したのは、福井駅が開業してから7年後の1903年だった（図4）。

この駅前通りには福井県庁舎が立地していた。この県庁舎は1898年に移転した師範学校の校舎を修繕して使用していた。校舎は1877年と1890年に建築されたものである。老朽化に伴い新庁舎の建設は検討されていたが、移転を前提としていた。旧藩主松平家に払い下げられていた城址をその候補地として借り入れの交渉を進め、1919年無償貸与の契約が結ばれた。さっそく県会で県庁舎の新築

にかかる追加予算が審議された。総工費は約115万円、そのうち約111万円を県債とし、現庁舎の敷地の売却代を約90万円として県債の償還に充当する計画であった。県会での県当局による城址を移転先とする理由では、土地が高燥であること、四周の眺望が雄大であること、市の中心で交通の便が非常に良いことを挙げている^{注13}。

県庁は1922年、城址本丸跡に新築・移転したが、その跡地約六千坪の敷地の売却は進まなかった。県庁跡地の売却先探しを県知事から囑託としてその斡旋の依頼を受けていたのは、福井商業会議所の書記長だった坪川信一であった。坪川は、それまでに面識のあった熊谷三太郎に相談に出かけている。熊谷は、熊谷組を興した人物であり、当時、福井市会議長も務めていた。熊谷からは、六千坪をそのまま売るのはなく、小割りにするようアドバイスを受けた。

坪川は土地の存在価値を高めるとともに、その土地に市民の関心を集めるために、納涼遊園地を企画した。このイベントで福井市民の注目を集め、そのあとに忽然と土地分割の売り出しを発表する段取りだった。熊谷からのお墨付きをもらい、福井商業会議所主催で1925年、ひと夏だけの納涼遊園地が開催された。開催されると連日の大賑わいとなった。その模様は地元紙^{注14}に報じられている。

「市の中央に荒廃五千坪の空地を有する不体裁それを巧みに利用して納涼と歓楽の巷にしようとの納涼遊園地」で、照明がふんだんに取り入れられ、「光彩の海を泳ぐ人の波」「惜しげもなく使った電灯に誰もが眩惑されて、佇む人が黒山のように」というように大盛況であった。新聞の見出しには「福井には出来過ぎた納涼遊園地」とあった。

納涼遊園地はこうして盛況に終えた。その年の年度末、1926年3月に改めて県庁跡地を区分して入札をすると、敷地の半分近くの売却が決まった。通信省や福井銀行などが買い手となった。しかし中央部分約六百坪だけは売れなかった。坪川は売却の経過を熊谷に報告すると、熊谷から自分で買っても良いという返事をもらった。熊谷から、その土地の利用の仕方について尋ねられた坪川は、子供

図3 福井駅の建設予定地^{注15}

図4 堀の埋め立てと駅前通り^{注16}

図5 だるま屋の立地と駅前通りの整備^{注17}

図6 福井駅前通りの商店街形成^{注18}

図7 だるま屋の立地と市街地の関係^{注19}

のための教養、娯楽、洋品販売を中心とした百貨店を自ら経営したいと申し出た。熊谷はその考えに共鳴し、土地、建物、運転資金、あわせて三十七万円余りの資金を提供した^{注20}。こうして坪川は県庁跡地に1928年、だるま屋を創業した。福井市内にはそれまで勸工場や公設市場があったが、いずれも異業種の小売業者が集まった寄り合い型の店舗であった。百貨店としてはこのだるま屋が最初であった。

1930年の地元紙には、「福井の繁華にも大きな変遷が見られる、そのかみ呉服町・京町辺の北陸街道が中心街だったのが、鉄道の開通後少しづつ淋れ、二、三年前までは片町通りが繁華に酔うてゐた、それが最近では駅前通りに移り東から西へ進んだといはれる世界文明に反して、福井の繁華はかくして漸次西から東へ移つてきた^{注21}」と報じられた。夜になると人通りが途絶えた駅前通りも、ただるま屋の電飾が不夜城のように明るく、閉店時間の夜十時まで人通りが絶えなくなった。

また近くの堀は1933年頃から埋め立てられ、家屋が建ち並ぶようになった。1932年に認可された都市計画街路では、だるま屋前の駅前通りの幅員は22mで計画された^{注22}。これは市内で最も広幅員である。翌1933年は陸軍大演習のあった年であり、それに併せて市内幹線道路や橋梁の整備が進んだ。福武電気鉄道が福井駅前まで延伸し、だるま屋前の駅前通りに軌道が敷設され、同年10月に開通した(図5)。駅前通りは舗装され、歩車分離により、随一の目抜き通りとなった。

だるま屋に対抗して出店した百貨店である福屋の進出(1936年12月開店)は、だるま屋の立地によって賑わいが生まれた駅前通りの発展をさらに促し、市内第一の商店街が形成された^{注23}(図6)。

3. 建築計画と都市景観

(1) 天満屋

①百貨店建築としての開業

1925年3月に開店した天満屋の新築店舗は、十間四方の洋風木造三階建て、延床面積約1千㎡であった。呉服太物、洋反物に加え、

図8 天満屋の開店広告

洋品雑貨、子供服、化粧品、文具、おもちゃなどを取り揃えた。三階には食堂があった。

開店にあたって、地元紙に「新築記念大売り出し」の4段抜きの広告を載せている^{注24}(図8)。広告の中では、仰ぎ見る三層の建物の絵とともに、「面目を一新した天満屋は岡山唯一の百貨店として簡易と御客様本意を信条として居ります」と記されている。新築による「面目の一新」と「岡山唯一の百貨店」の誕生について、新規性、優位性、さらに「簡易」という大衆性を打ち出している。実際には三層であるが、一階部分を図では省略し、仰ぎ見る構図によって高さを主張している。

開店日は陸軍記念日で、連隊では軍旗祭などがあり郊外からも人出があった。例年の多くの人出にあわせた開店日であった。入店する客の整理が追いつかず、入店の規制を行った。陳列ケースと販売台を並べ、立ち売りの対面販売であった。開店時はまだ下足預かり制度であり、靴を履いている客には靴覆いを出し、通路に敷いたござの上を歩かせた。

新規開店の様子は新聞には報じられなかったが、天満屋は3月16日の地元紙に「御礼広告」を掲載した^{注25}。そこでは「過般新築記念賣出開催中は賑々しく御光來賜はり有難く御禮申上候何分開店早々且つは混雑の際何角と不行届の段謹で御詫申上候」と記されている。混雑時の対応への一種のお詫びであり、謙虚な姿勢を示している。新聞記事として報じられなかった分、来店していない読者に対して盛況な様子を広報するという新聞広告の効果を活かしている。

②増築の店舗とまち並み景観

1925年の開業以来、隣接する土地の買収を進めるとともに、別館(1926年10月20日)、西館(1927年3月10日)、北館(1927年5月5日)と相次いで増築した(図11)。

別館は鉄筋コンクリート造の三階建てで事務部門と従業員の食堂や宿泊施設等を収容した。西館は本館に隣接して増築され、写真室

図11 天満屋店舗の配置見取図^{注26}

図12 一階平面図(新本館)

図9 天満屋と前面道路

図10 天満屋のショーウィンドー

図13 南西からの眺望(新本館)

や理髪室などサービス部門を加えた。北館の開業時に、下足預かり制度を廃止し、本館の屋上には庭園と展望台を設けた。

こうした増築の中で特に話題となったのはエレベータの導入であった。1927年の増築の際には、「天満屋のエレベーター 明五日から運轉開始」と題して増築落成披露の案内記事が掲載された²⁷。増築にあわせて店内を大改造し、岡山市で最初の乗客用エレベータを新設し、屋上に七十坪の屋上庭園と二十坪の展望台を設けて、「理想的デパート」にしたと報じられた。

さらに買収した郵便局跡地の南側の空地で1935年2月、新本館の工事が始まった。1935年発行の岡山の観光案内書には、天満屋について「中國一の大デパートで一日數萬の顧客を吞吐してゐる」と紹介し、新館目下増築中として完成予想図を掲載している²⁸。なお1934年9月の室戸台風により岡山市内は市街地も浸水し、天満屋の店舗も1階売り場が浸水した。この経験から、新本館は1階の床の高さを高くするために設計変更がされている²⁹。

また新本館の工事も進み、四階までできていた工事最中の1936年3月11日に、三階建ての木造本館が全焼した。午前七時頃、三階の食堂付近から出火し、「何分同所は岡山目貫きの商店街で大小建物が並んでおり³⁰」、北側に隣接する派出所、商店や写真館などに延焼した。火災当日は地元紙が号外を出して報じている。所轄の警察署長は、高層建築物の防火施設には学ぶべきものがあると語っている³¹。天満屋の経営者は、火災に弱い木造を目の当たりにして、工事中新本館が鉄筋コンクリート造であることの妥当性を再認識したに違いない。

新本館は、1936年8月31日に竣工した。9月30日に落成式、開業は翌10月1日である。開業日当日の地元紙には見開き二面に渡った紹介記事と企業広告が掲載されている³²。その中では、「岡山名所の天満屋新館が落成」し「岡山商店街の中樞部に屹立するクリーム色の瀟洒な現代日本式、高樓六層の威容は縣下高層建築史上に初頁を飾る」として報じられた。塔屋は、「トップにヤマテンの社旗を翻へし夜はテンヤマのネオンサインが岡山の街何処からでも眺められた。高さは「實に地上百二十三尺餘り、ここからは岡山市内は一眺に納められ、遠く児島の海も眼の下に集ま」ってくると紹介されている³³。建物の高さが強調されている。この新本館は、地下一階、地上六階、エレベータのほか、冷暖房装置も導入された。五階には七百名収容の大食堂、屋上には「子供の国」がつくられた。東側正面の軒高はスケートリンクの切妻を除いて90.5尺（約27m）、塔屋上端までは123.5尺（約37m）であった。一階の通りに面して、正面入口の左右に飾り窓（ショーウィンドー）があり、その床は桜の寄せ木貼りであった³⁴。

先述のように天満屋の立地していた通りは、封建時代の「目抜き

通り」で、その道路幅員は狭いままだった。そのため、記事では建物の高さが強調されたが、この通りからは店舗の高層部を含む外観を一望することはできなかった。高層部を表すには別な角度からの写真にならざるをえなかった（図13）。本館開業後の写真（図9、10）をみると、この通りには「日覆い」が設けられていたことがわかる。この「日覆い」は、商店街の共同施設で、構造は鉄製の細い支柱と桁であった。その上部に、必要に応じて布製の覆いを道路全面に渡した、現在のアーケードの原型である³⁵。高層化が図られても、この日覆いが渡されたらなおさら、通りからはその全容を認識することはできない。通りを歩く人々は、道路に面したショーウィンドーを通して百貨店の存在を意識した。

（2）だるま屋

①創業店舗の建築と開業前後

だるま屋は1927年12月、店舗の基礎工事に着手している。その工事の光景は人々の衆目を集めた。「昭和三年のまだ浅い三月初め、舊縣廳舎跡の廣場の一角に作られた五百坪ばかりの板圍ひの街路に面した右の端に「だ」の字が一つ大きく浮き出した。「何だらう？」人々の眼は皆一様に其の「だ」の字に囚はれた。…（中略）…噂は早くも街から街へと傳はつて行き、人々は不思議な好奇心に唆られてゐた。と其の翌日「だ」の字の次へ「る」の字が又現はれた。次の日には「ま」の字、その次の日には「屋」の字が出て、それは「だるま屋建築敷地」であることが始めて呑み込めた。だるま屋と云ふ名稱は斯うしてまだ建築が出来ない前から市民のみならず廣く縣下の方々へ知れ渡つてしまつたのである³⁶」と伝えられている。

その当時、福井駅の駅舎も拡張工事がされていた。それにあわせて、だるま屋も新築工事が進んだ。「きのふ迄の野原のやうであつたあの廣場に今盛んに建築を急いでゐるのは「だるま屋」で

図14 だるま屋の一階平面図

図15 だるま屋店舗の配置見取図

図16 だるま屋と駅前通り

図17 増築後のだるま屋

図18 「コドモの国」増築

何がさて福井の玄関通りに無くてならない立派な建築だ」と、だるま屋の建築中の写真を添えて地元紙に報じられている^{注37}。このように建築工事中から、新たな店舗の出現に対する期待があった。

開店当日は、地元紙の第一面の右下に紙面の 1/4 ほどのスペースに、特売部売り出し品として特製コナ石鹸と、コドモ百貨部の二つの広告宣伝を掲載している^{注38}。同じ新聞の第四面には記事として「だるま屋」の開店が写真とともに紹介された。

創業当時の店舗は、木造二階建て、間口 25 間、奥行 15 間の本館のほか、南側には平屋建ての貸店舗マーケットがあった^{注39}。このマーケットの出店者を建築中の 5 月に賃貸市場として募集した^{注40}。市内小売業者との共存という配慮は、坪川自身が福井商業会議所の書記長という立場であったことと無関係ではないであろう。開店当時のマーケットには八百屋、肉屋、洋服雑貨店など 25 店が連なっていた^{注41}。マーケットはコの字形に通路が設けてあり、通路に面して両側に間口 2 間くらいの店が並んでいた(図 14)。常時 20 前後の店舗が入居し、正札販売、現金販売、商品の価格は市価以下とするなどの共通の営業方針により、相当の利用者があった。

だるま屋は 1928 年 7 月 6 日の大安に開業し、初日は大盛況だった。一万人を越える客足で^{注42}、屋上バルコニーの「子供の遊び場」は数百人もの子供で賑わった。マーケットも「大入満員で往き来ふにも支障を感じる」ほどだった^{注43}。比較的、郊外の郡部からの客が多かったらしい。あまりの混雑さに、警察当局からの注意があり、

閉店予定時間を待たずに店を閉じざるをえなかった。その時には店舗前にはまだ千人あまりの客がいたという^{注44}。開店二日目も、開店時間前にすでに数百人が玄関前に押し掛けていた^{注45}。

②「コドモの国」の増築

開業三年目の 1931 年、本館に付属して「コドモの国」が増築された。1 月 2 日に開館したが、冬季には子供の遊び場がなくなる福井では「破天荒の運動場であり娯楽場^{注46}」であり、市民から大きな期待を寄せられていた。二階建てで、各階二百数十坪あり、遊具施設や運動用品が多数用意されていた。

さらに「コドモの国」を一部改造し、定員 180 席の舞台付きのホールがつくられた。そして常設の少女歌劇を結成した。1931 年 11 月の初演から 1936 年 8 月 1 日の終演まで、8 月を除いて毎月演目を替えながら歌劇の公演が続けられた^{注47}。それまで三越や白木屋などの百貨店では、少年あるいは少女音楽隊を結成していた。一方、少女歌劇は宝塚や松竹などがあり、戦前に全国で 20 以上あった^{注48}。店主の坪川は関西で盛んだった少女歌劇を取り入れ、コドモの国というレジャー施設に付随する劇場の形式など、宝塚の影響を強く受けている。しかし百貨店が主催する歌劇で、かつすべての歌劇部員が店員であるというだるま屋少女歌劇は全国でも特異な存在であった。なお坪川は松竹少女歌劇のファンであつたらしい^{注49}。1935 年に公会堂ができるまで、市内には適当な舞台付きの集会施設がなかったため、だるま屋のホールが集会や展覧会などの会場としても利用された。

このようにだるま屋は単なる営利目的の百貨店経営ではなく、坪川は文化や教育にも軸足を置いた運営を重視した。資金を提供した熊谷はこの百貨店の経営が心配の種であつたらしい。口癖のように家族にもらしていた^{注50}。ことあるごとに店の様子を見に出かけ、競合する福屋百貨店の開店日には、夫人に様子を見に行かせたりしていた。しかし坪川は創業後も相次ぎ増築を進め、積極的な経営姿

表2 だるま屋の来店客数の推移

期 間	営業 日数	客数 日 (人)	備 考
1928 年 7 月 ~ 11 月	145	2,606	開店
1928 年 12 月 ~ 1929 年 6 月	210	2,343	
1929 年 12 月 ~ 1930 年 11 月	361	3,061	
1930 年 12 月 ~ 1931 年 11 月	363	3,505	1 月コドモの国 11 月少女歌劇
1931 年 12 月 ~ 1932 年 11 月	363	4,056	
1932 年 12 月 ~ 1933 年 11 月	360	5,423	
1933 年 12 月 ~ 1934 年 11 月	351	5,872	
1934 年 12 月 ~ 1935 年 11 月	352	6,137	

注:「日誌」西川家文書、福井県文書館より作成(記録は 1935 年 11 月まで)

図 19 増築後の復元立面(駅前通り側)

図 20 創業時の復元(近景)

図 21 増築後の復元(近景)

図 22 増築後の復元(遠景)

勢を堅持した。創業以来、景気に左右されず来店客数は増加し（表 2）、黒字を重ねていたことは、それだけ市民の支持を得ていたことを実証している。当時は人口十万人が百貨店の成立の目安とされていた^{注 51}が、人口六万人の福井で成功しただるま屋は、その意味でも業界内で注目された。坪川の主義である「教育の商業化を標榜して、理想的な百貨店経営を試み全国百貨店中に異彩を放って」いたし、「内外店員のサービスが實に行届いた點は、全國業界の範とするに足るものである」と言われていた^{注 52}。

③まち並み景観

駅前通りに面して正面入口のあっただるま屋の創業店舗のファサードには特に特徴はみられない（図 14、16）。これまでに確認できた平面図及び写真から、既稿^{注 53}と同様の手法で創業時と 1931 年に開業した「コドモの国」増築後の外観について CG による復元を試みた（図 19～22）。なお図 21 と図 17 は同じ構図であり、図 20 は図 21 と同じ視点場から見た創業時の外観（近景）である。図 22 は増築後の遠景である。

「コドモの国」は角地に増築され、入口はその角に設けられた（図 18、22）。その上層部に加えられた展望塔は、白木屋や山形屋などでも採り入れられた手法であり、角地建築の商業施設の正面性を象徴している。しかしだるま屋のそれは他の百貨店とは異なり、建築的な一体感は乏しく、上部に付け加えられた装置といった感がある。

福井駅から歩いてこのだるま屋に向かった当時の景観は次のように記されている。「驛を出ると眼前に展けた福井の第一印象は、田舎とは思へない街の清新さで、だるま屋は、この驛前通り、福井城趾の石垣と相對し、武家盛なりし頃を嘲笑ふが如く、時代の新しい装いを誇り顔に建つてゐます。間口三十九間、奥行三十間、外観二層、内部三層、延坪一千五百坪、大都市のデパートに比ぶれば物の数ならぬ建物であるとしても、市の大きさ住宅の数に比べれば、東京、大阪の大百貨店よりも、より大きい存在であるのです。^{注 54}」これは、大都市の百貨店では赤字で閉鎖しているような不景気にあって、人口わずか六万人の都市で大繁盛しているとして、だるま屋を紹介している『主婦之友』に掲載された記事である。福井城址の向かいにある近代的な百貨店を対照的に捉えている。

1935 年にだるま屋を訪れた立教大学の伊藤重治郎教授は、「驛を出ると三町と走らないのに往く手に當つて巍然と聳えた建物が満館電光のイルミネーションを煌々と輝かして居た。映畫館にしては大きすぎる、劇場にしちやあ何となく様子が違ふが、と思ひながら近づくと、何とそれが既にわが目指すだるま屋であつたのである。斯んな市の取つ掛り、向側は昔の城の石垣の残つて居る、言はゞまだ郊外氣分の所に百貨店があらうとは、實は一寸意外であつた^{注 55}」と、率直な印象を述べている。

やはり一般的イメージの百貨店、おそらく大都市の百貨店と比べ、百貨店らしくない建物であること、かつ立地が城址の石垣に近い場所であることに、とまどいが感じられている。

さらに続けて、「建物その物からして近來大都會に出来る百貨店が華麗を競ふ所謂殿堂であるのと對照すると、この建物は先づ小學校程度で、サツハリして入り易く親しみ易いもの」であり、店内の気分が学校の創立記念日のバザーを連想させるなど、だるま屋百貨店が「ピンから切まで、凡そ『百貨店』といふ概念とは違つた行き

方の事業団」として、百貨店という既成概念に当てはまらない存在であると指摘している。

だるま屋の規模は決して大きくはなく、また高層でもない。したがって他の大都市の百貨店のようなまち並みへの威圧感はない。同時代的記述にもあるように、百貨店建築としては異質であり、親近感のある建物であった。それが市民に受け入れられた素地の一つになったとみられる。

4. 結論と考察

本稿では天満屋とだるま屋の開業期の立地特性やまち並みにおける景観の実態について明らかにした。既稿で明らかにした山形屋も対照すると、これら三百貨店から、六大都市以外の地方都市にも百貨店が誕生した萌芽期から昭和に入ってから後発の百貨店への展開をみることができる。

山形屋と天満屋の経営母体をみると、他の大都市の百貨店と同様に江戸時代の呉服店にまで遡る。ただし立地の経緯をみると両者は異なる。山形屋は従来からの立地場所を拠点とし、軌道ルートを誘致することで商業の中心となることに成功した。天満屋は、藩政期からの商業集積地である現在地に近郊から進出した。また前面道路の拡幅もなく、軌道ルートからもはずれているが、市内の中心商業地を継承した。一方、昭和になって創業しただるま屋はまったくの新たな開業であり、しかも商売の素人が百貨店の経営に乗り出した。開業した場所は、駅前通りの福井県庁舎の跡地であり、出店計画時は閑散とした場所であった。しかしだるま屋の開店と駅前通りの軌道敷設を伴う整備によって繁華街へと発展することになった。

山形屋は高層大規模な建築として、まち並みに対する圧倒的な存在感があり、かつ角地に高塔を設けた建築としての象徴性を有し、大都市の既存の百貨店の影響を強く受けている。天満屋は前面道路の幅員が狭く、また日覆いがあるため、高層建築を見上げる視線を確保できなかった。人通りの多い通りに面したショーウィンドーによって近代的な景観を表現し、誘客が図られた。だるま屋は低層の「百貨店らしくない」建築であり、地元小売商との共存の志向、歌劇の導入や子供重視の姿勢などの独特な理念によって、地域に密着した経営が採られた。ただし天満屋とだるま屋は、それぞれ増築によって角地に立地することとなり、二方向からの誘客を可能とした。そしてだるま屋は増築によって角地店舗の象徴性を付与した。

このように三者とも、経営や立地の経緯は異なるが、いずれも市民の支持を得て、持続的な経営と増築などの積極的な投資に結びついた。地方の百貨店の萌芽期にある山形屋は先行する大都市の百貨店の影響を強く受けたが、それ以降に開業した天満屋やだるま屋では、そうした成功体験をそのまま採用するのではなく、独自色が強かった。

付記

本研究は、大林都市研究振興財団から研究助成を受けた。記して謝意を表したい。

参考文献

- 1) 天満屋：天満屋百五十年史、天満屋、昭和 54 年
- 2) 本館新築工事概要、天満屋、発行年不明（内容は昭和 11 年の新築工事のこと）

- 3) 天満屋：記念、天満屋、昭和3年
- 4) 岡長平：天満屋の歴史、岡山新聞社、昭和28年
- 5) 藤田村雨：だるま屋店主坪川信一の偉業、丁酉社、昭和13年
- 6) 西川秀男家文書、福井県文書館蔵
- 7) 野中勝利：鹿児島・山形屋の開業時の立地と景観－地方都市における近代百貨店に関する研究－、日本建築学会計画系論文集 No.611、2007年、pp159-166

図版出典

- 図1及び図2「岡山市街全図」（筆者蔵）部分・一部加筆
 図8 山陽新聞、大正14年3月7日
 図9 新聞記事と写真で見る世相おかやま〔昭和戦前明治大正編〕、山陽新聞社出版局、平成2年、p221
 図10 参考文献3) 図12 参考文献2)
 図13 大日本百貨店帖、百貨店新聞社、昭和12年、所収
 図14 参考文献6) 図16及び図17 絵はがき（筆者蔵） 図18 参考文献6)

注

- 注1) 参考文献7)
- 注2) だるま屋は、1980年に「だるま屋西武」、2006年2月26日に「福井西武」となっている。
- 注3) 参考文献1)～4)
- 注4) 参考文献5)
- 注5) 福井県文書館：文書館だより、第3号、福井県文書館、2004年、p6
- 注6) 岡山市百年史編さん委員会編：岡山市百年史上巻、岡山市、平成元年、p594
- 注7) 岡山市、岡山市勸業課、昭和2年、p11
- 注8) 宇垣武治：岡山の遊覧、細謹舎、昭和4年
- 注9) 「昭和二年公文雑纂」巻31、国立公文書館所蔵
- 注10) 榎亀吉：閑窓臥遊、松本米次郎（私家版）、昭和7年、p17
- 注11) 商店員の先進都市商業視察報告、金澤商工會議所月報、第44巻第5号、昭和9年、pp10-16
- 注12) 明治7年の町名の整理統合で、呉服町と本町は、それぞれ大和上町・大和下町、照手上町になり一般の市街図にもその町名になっているが、一般市民の日常生活にまでは浸透せず、藩政時代の町名が多く使用されていた（福井市：福井市史資料編別巻絵図・地図、平成元年、p208）。
- 注13) 福井県議会史編さん委員会編：福井県議会史第二巻、福井県議会、昭和49年、pp1124-1126、pp1168-1171
- 注14) 福井新聞、大正14年7月6日
- 注15) 「福井市全図」明治27年（福井市史編さん委員会編：新修福井市史、附録市街地図、福井市、昭和51年、所収）・部分・一部加筆
- 注16) 「市区改正福井市街地図」明治41年（筆者蔵）・部分・一部加筆
- 注17) 「福井市街全図」昭和8年（福井市史資料編別巻絵図・地図、福井市、平成元年、所収）部分・一部加筆
- 注18) 「大日本職業別明細図・福井市」昭和15年（筆者蔵）・部分・一部加筆
- 注19) 「福井市街地図」明治42年（福井市史編さん委員会編：新修福井市史、附録市街地図、福井市、昭和51年、所収）・部分・一部加筆

- 注20) あゆみー福井商工會議所八十年史一、福井商工會議所八十年史編纂委員会、昭和39年、pp142-143
- 注21) 大阪朝日新聞福井版、昭和5年1月9日（福井市史資料編11近現代二、福井市、平成6年、pp951-952）
- 注22) 「昭和七年公文雑纂」巻45、国立公文書館所蔵
- 注23) 福井市役所編：稿本福井市史上巻、福井市役所、昭和16年、p805
- 注24) 山陽新報、大正14年3月7日、9日
- 注25) 山陽新報、大正14年3月16日
- 注26) 参考文献1)、p51より作成
- 注27) 山陽新報、昭和2年5月4日
- 注28) 観光の岡山、岡山宣傳社、昭和10年、頁なし
- 注29) 参考文献(4)、p64
- 注30) 山陽新報、昭和11年3月11日付号外
- 注31) 山陽新報、昭和11年3月12日
- 注32) 山陽新報、昭和11年10月1日
- 注33) 山陽新報、昭和11年10月1日
- 注34) 参考文献2)、p3
- 注35) 辻原万規彦、藤岡里主：アーケードの原型としての日覆いに関する研究、日本建築学会計画系論文集 第596号、2005年、pp85-92
- 注36) 参考文献5)、p3
- 注37) 福井新聞、昭和3年4月3日
- 注38) 福井新聞、昭和3年7月6日
- 注39) 西川家文書、福井県文書館所蔵
- 注40) 福井新聞（昭和3年5月13日）に「市場貸貨広告」を掲載し、営業種目は米穀類ほか31種、申し込み期日は5月15日限りという条件であった。
- 注41) 福井新聞、昭和3年7月5日
- 注42) 福井新聞、昭和3年7月8日
- 注43) 福井新聞、昭和3年7月7日
- 注44) 坪川信一：思い出の数々、熊谷三太郎伝記編纂室編：熊谷三太郎、熊谷三太郎伝記編纂室、昭和32年、pp171-221
- 注45) 福井新聞、昭和3年7月8日
- 注46) 福井新聞、昭和6年1月1日
- 注47) 「だるま屋少女歌劇プログラム」高田富家文書、福井県文書館所蔵
- 注48) 倉橋滋樹／辻則彦：少女歌劇の光芒、青弓社、2005年、p7
- 注49) わがまち福井、福井市・福井市教育委員会、平成2年、p90
- 注50) 熊谷三太郎：父の思い出、前掲：熊谷三太郎、pp115-116
- 注51) 伊藤重治郎：百貨店の趨勢、講演と沿革、早稲田大學廣告研究會、昭和8年、pp39-62
- 注52) 昭和十二年版日本百貨店総覧、百貨店新聞社、昭和11年、pp174-175
- 注53) 参考文献7)
- 注54) 特派記者：教員ばかりで経営する福井のだるま屋百貨店の繁昌法、主婦之友、主婦之友社、昭和8年1月号、pp356-365
- 注55) 伊藤重治郎：特異の経営で当つただるま屋の繁栄振り、現代、大日本雄弁会講談社、昭和10年7月号、pp520-525

（2006年12月6日原稿受理、2007年6月1日採用決定）